

2021年11月28日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「エッサイの株から」

聖書：イザヤ書11：1～10

今日からアドベント（待降節）。イザヤ書11章はキリストを待ちわびる預言書としてある。時代の覇権争いに翻弄され、強者と弱者という常に暴力に依存する社会の只中でしか生きられない構図の中に、キリストの到来を待ちわびる預言が記されている。

この時代は、キリスト誕生からはるか700年以上も前のユダ王国で預言者イザヤによって記された。イスラエル王国がすでに北と南に分裂し、その北のイスラエルはアッシリア帝国に滅ぼされ、残された南のユダ王国も風前の灯火で存亡の危機にあった。そうした時代にあつて預言者イザヤは、エルサレムの民とユダ王国の王や官僚たちに預言として言葉を発信して行く。

新しい王は、「エッサイの株から・・・若枝が育ち」というが、実際に父エッサイから若枝が育ち、ダビデが育って王となったが、ここはそのダビデのことを再びと言うことではない。ここは「ダビデの株から」ではなく「エッサイの株から」である。ダビデ王は、権力、武力、知力にまさる者でこの世の力としての象徴とみなされたが、しかしエッサイは殆ど名も知れない、田舎の羊飼いとして生きた人で小さい存在として位置付けられている。サムエル記上の中でイスラエル初代王サウルは、ダビデを呼ぶ時に「エッサイの子」としきりにそう呼ぶが、それは羊飼いの息子という小馬鹿にして呼んでいた。「エッサイの株」という表現は、繁栄や権力、力強さではなく、貧しさ、身分の低さを思い起こさせる呼び名としてあり、そこに立つことの意義、その貧しさ、低さ、小さくされたところから、主なる神は平和の王を立てられると預言者は語る。

キリスト到来の世界は、「狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す」という。その世界は来ているのか？ 強者と弱者が共に暮らす社会は作られているのか？ その世界はまだ来ていないとするならば、キリストの誕生はまだ来ていないということになる。いや、キリストはこの世に誕生した。教会は今年もクリスマスをお祝いする。教会はキリスト到来の証しをしなければならない。

「その日が来れば／エッサイの根は／すべての民の旗印として立てられ／国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。」（イザヤ11:10）

「エッサイの株（根）」とは、小さくされたところを意味する。そこにこだわり、そこに立ち続けてキリストを証しするところに教会の成すべき業がある。（神谷）